

ニッポン英語ウオッチング

大澤 公邇

(データベースシステムズ代表・元 OSTEC 講師)

School, ノットオンリー学校バット

南国では、もうすでに春ですぬの陽気になり、小川はさらさら行き、海老や小鮎の他に『メダカの学校』も新学期の準備に入っていることでしょう。

ところで、あの童謡の作詞者は、school に「群れ」と言う意味があることを、そして魚群を a school of fish と呼ぶことを知っていたのか、それとも『スズメの学校』からヒントを得ただけにすぎないのでしょうか。発表の時間は、作家・平林たい子が「とかくメダカは群れたがる」と言ったときより以前だったようですから、これとは無関係だと思えます。

歌謡曲『港町十三番地』は、明るい歌詞の内容から、作詞者が「13」を不吉とする欧米の迷信について無知であったことが、うかがわれます。世間で「13」と言うのをよく耳にするので、ラッキーセブン(the lucky seventh)の7や、末広がり八のような、おめでたい数だと、おめでたく解釈して使ったのでしょうか。

この”school”や”13(thirteen)”は、どの英和辞典にも載っていますから、ちょっと引いてみればよいのに、作詞家だけではなく、「魚の学校」との翻訳を平気で納品してくる(自称ではない)翻訳者も(not only lyric-writers but also translators)いるのには困ります。(余談ですが筆者が生まれて初めて見た天然色映画[color movie]は、米国の漫画でして、物語は、海中の「魚の学校」で先生魚が生徒魚たちに、人間の用いる仕掛けを説明し、警告しているクラスをサボった一匹が、簡単につり上げられてしまうと言う筋でした。昭和12年(1937)頃ですから、その時点での四、五歳児には、school に school を掛けた洒落などは、勿論理解できるはずもありませんで

した。)

冒頭の小見出しの『not onlybut (also) はジャパニーズ・イングリッシュである』と、よくあれで1年3ヶ月も続いたと呆れる、某TV局の司会者が言って、全国的に英語を汚染して、使えなくしてしまいましたが、筆者が翻訳し、近日発売の『マーケティング・マスターズ』(東急エージェンシー出版部刊)の原著、”Marketing Masters”にも、not onlybut (also) は、数回用いられていました。

英語以前に日本語を

「英語よりも日本語の方が重大。翻訳者の日本語表現力の低さに呆れることが多い」。前回お話した、世界翻訳の日記念行事のパネル討論会『こんな翻訳が欲しい』のパネリスト諸氏は口を揃えて、こうおっしゃいました。英和、和英、どちらの方向においても、通訳・翻訳者には、英語以前に日本語力(国語力)が重要であると、20年ほど昔に『英語以前』と言う本で主張した筆者は、この発言に心底から同感しました。それで今回は、日本人による日本語表現について考えてみたいと思います。

変わりがナイか、アルか

「磯の鵜の鳥夕べにや帰る、波浮の港は夕焼けこやけ」では、伊豆大島には鵜は住んでいないし、波浮港は東向きだから夕焼けは見られないとか、23区内もしくはその周辺で昼までに投函すれば翌日に配達されるから、「三日遅れの便り」を載せることはないと言われてますが、これらは“文学的虚構”として認めるべきであり、とがめだてするのは野暮でしょう。

しかし「富士の高嶺に降る雪も京都先斗町に降る雪も、雪に変わりが無いじゃなし」

は、日本語として間違っています。「変わりがナイではナイ」では、変わりがアルことになってしまいます。「溶けて流れりゃみな同じ」と続くのですから、「雪に変わりがあるじゃなし」としなければ、意味が通じません。

“瞳の母”で忠太郎も目を白黒

単語の用法で異常なのは、ニューミュージック系での「瞳」です。昭和20年(1945)以前生まれにはあまりモテないようですが、それ以前の世代にとっては女神同然の松任谷由美が新井由美の頃から頻繁に用いた「瞳を閉じて」「瞳を閉じれば」を、後続の若者達が、これでもか、これでもか、といわんばかりに踏襲しています。ワンズ(WANDS)の『恋せよ乙女』、中西ツヨシ『最後の雨』、徳永ヒデアキ『輝きながら』、歌手名失念『夏のクラクション』等々、枚挙にいとまがありません。

「瞳」とは瞳孔(生徒ではない pupil)のことであり、その周囲の虹彩(iris)が受光量を調節するために閉じたり、開いたりするもので、本人の意思で開閉できる随意筋の「瞼(eyelid)」ではないはず。「瞳の母」では番場の忠太郎も目を白黒させてしまうでしょう。「ヒトミを閉じればママの姿が浮かんでくる」では昔の少女小説です。これは、やはり「瞼」と「おっ母さん」の組み合わせに限りません。

「瞳を閉じて」の元祖は“ユーミン”か、いやそれよりも、もん太&ブラザースの『ダンシングオールナイト』の方が古いはずだと思っていたら、さらに昔、グループサウンズ・ザ・タイガースの歌の文句にも含まれていました。(題名は覚えていませんが)。松任谷由美は、平成6年(1994)の『春よ、来い』で瞼閉じればそこに〜と、するりと抜けて、長谷川伸に同調しました。

乳は個体なのか？

「日本語を知らない」とか「日本語表現が間違っている」とか言って、翻訳者だけを非難してはいられません。作詞家と同じく日本語のプロであるはずのジャーナリストも、珍妙な日本語を使っています。その代表例は、新聞に掲載される、あるいは電

車内に中吊りされる、週刊誌の広告の「巨乳」と「美乳」です。この「巨」や「美」が修飾する対象は、液体の「乳(milk)」ではなく、“柔らかな”個体の「乳房(breasts/bust)」であるはず。液体を「巨大なビール」とか「美しいコーラ」も美コーラも日本語として存在していません。

大きいとか美しいと言われているものは、乳の生産・貯蔵・供給を行う「乳房」であり、「房」とは「厨房」や「閨房」に見られるように「部屋(chamber)」あるいは「容器物(container)」の意味です。

広告では“ちょっとだけよ”で、あとは本誌を買えば全体があらわにされるものは、表現を2文字に限定しなければならないならば、「巨房」と「美房」に帰るべきでしょう。

足は長くても、手が短いのは困ります。「彼って足が長くってかっこいいの」と若い女の子がよくいいます。これは賞賛の表現ですが、その後に「手も長くって素晴らしい」と続けられると、「おいおい、それは穏やかじゃないね」と言わざるを得ません。「あの人って手が長いそうよ」という、特に女性が用いていた婉曲表現は、すっかり廃れてしまったようです。(例えば『広辞苑・4版』p.1741, 2段目、『原泉』p.1575、2段目ご参照)。これと対照的に「手が早い」は、良い意味で一つ、悪い意味で2つ、すべて健在です。

「短足」とは「短脚」のこと

新聞雑誌では、巨乳や美乳と並ぶ珍語として「短足」が多用されています。これは「あの男の子ったら、足が短くてかっこわるい。短足って、みっともないわね」という、女子中学生の造語を、彼女らと同じくらい国語の知識に乏しいジャーナリストが、無批判に受け入れた結果だと思えます。

足とは短靴(shoes)をはく部分であり、それより膝に近い方まで届く長靴(boots)に覆われる部分までは含みません。成年男子の靴の寸法は、筆者の世代の平均身長165cmでは24.5±0.5、現在の平均身長170cmでは25±0.5cm程度であると、靴店

における靴のサイズ別展示点数から判断されます。二十歳以上の男性が18cmとか20cmとかの靴をはいていた場合には、「短足」と呼べるでしょう。

女子中学生が適切に表現できなかつたけれど、言いたかったのは、「短脚」です。脚が、すなわち、腿(thigh)の付け根から踝(ankle)もしくは踵(heel)までの、長ければかっこいいとされる部分です。

日本語のプロであるはずの記者・編集者の国語力も、脚(leg)を覆えず、お寒い限りです。

漢字制限と訓読制限の弊害

大和言葉では足もアシ、脚もアシと言いますし、日常の日本語でも、手はテですが、腕もウデの代わりにテと呼ぶことがしばしばあります。しかし、外国語を学習・使用するためには、これらの定義の明確化が必要です。

小学校では「足と脚や、手と腕の違いを、中学校ではfootとlegや、handとarmの区別を、はっきり教えていないのではないのでしょうか。『あしながおじさん』を英語に復元せよと求められたら、「Long Foot Uncle」としてしまいそうです。あれは”Daddy Long Legs”ですよ。

漢字の意味を区別できない、その原因は、漢字制限にあります。1つの漢字で多くをまかなおうとしたり、平仮名での代用を強制したりするとところに無理が生じます。また、どの漢字にも音があるにもかかわらず、多数の漢字の訓を禁止していることから、不都合が生じています。ですから動詞にしても、見ると視るや、診る、観る、覧る、察るの違いも教えられなければ、seeとwatchや、tend/attend, observe, examineの区別もできなくなってしまうでしょう。

肉食主義以前から肉無しダイエット

「巨乳」『美乳』や「短足」などの珍語が造語(coin)される原因の一つは、大和言葉では、人体各部の呼称がアイマイであったり、存在しなかつたりすることであると考えられます。頭(head)と首(neck)も、ついたり離れたり、アイマイです。合戦で討ち取る大将首は、neckではなく、

head-huntingの対象の「頭」です。「吉良殿、御首級頂戴」も、やはり頭(head)のことです。たしかにneck部分も含まれてはいますが、....。

筆者は長いこと、牛肉や豚肉のニクを「訓」だと、そして回鍋肉などからの類推で、「ロウ」が音だと思っていました。ところが、漢和辞典を引いてみたら、ニクは呉音で、ジクが漢音、ロウは現代中国語の発音であり、「訓」は載っていません。日本人は、中国から漢字と「音」を借用した、一千数百年前まで、自分の肉体の「肉」を意識しなかったのでしょうか。また仏教の影響で肉食主義が普及する以前には、鳥獣を捕獲・飼育して食用に供していたからです。肉や内蔵に個々の名称を与えていたはずですが、肉食が廃れたため、それらの用語が消滅したのかもしれない。

古代から全員が江戸っ子

日本語では、肉だけではなく、内蔵も、すべて外来語である中国語に依存しました。大和言葉で内蔵を指すものは、漢字で「肝」と書き、「かん」という音が与えられる「キモ」と、狭義では大腸・小腸を意味する「ハラワタ/ワタ」だけです。このキモまたはワタを以て内蔵のすべて、五臓六腑を総称してしまう単純さです。五臓とは心臓、肝臓、脾臓、肺臓、腎臓であり、六腑とは大腸、小腸、胆嚢、胃袋、三焦(漢方専門語)、膀胱ですが、このどれにも訓はなく、対応する大和言葉もありません。日本人はすべて「江戸っ子は皐月の鯉の吹き返し」で、古代から腹の中が空っぽであるようです。

焼鳥屋に行くと、本来の日本語における内蔵の呼称の不在が強く感じられます。(ちなみに東京都内では焼鳥屋とは、昭和30年代初期から条例により、鶏肉の串焼きを主に供する店に限られていますが、横浜市では現在でも牛豚の内蔵を串焼きにした、モツ焼きの店も「焼鳥屋」を名乗ることが許されています。モツヤキとヤキトリの区別がないのです。)

モツは、大和言葉ではなく、音読みの臓物の短縮形です。借用は西欧にも及んでいます。鶏のモツと区別して牛豚の肝臓を意味するレバは、英語のリバー(liver)の訛り

であり、心臓を意味するハツは、英語のハート(heart)と、独語の(Herz)の混合に由来するとのこと。

人体各部（頭、胴体、四肢および内蔵）について、昔から明確な定義も呼称もない言語環境では、「美乳・巨乳」や「短足」などの珍語が考案・使用されるのも、しかたないことかもしれません。「脳」にも訓がないのは、思考能力の不足ですか。

(19 JAN. 1995)